

平成 28 年度 東京都内湾水生生物調査 2 月成魚調査速報

●実施状況

平成 29 年 2 月 15 日に成魚調査を実施した。調査当日は中潮で、満潮が 7 時 24 分、干潮が 13 時 33 分であった(東京都港湾局のデータ)。調査当日の透明度は 2.0~3.8m であり、赤潮状態は確認されなかった。また、底層の DO は、St.25 で 9.6mg/L、St.35 では 8.1mg/L、St.22 では 7.9mg/L、St.10 では 9.2mg/L であった。全地点でハタタテヌメリ等の魚類が確認されたほか、エビジャコ属やケブカエンコウガニ等の甲殻類も多く確認された。

	St.25		St.35		St.22		St.10	
作業時刻	11:13-11:50		10:07-10:40		12:13-12:50		12:54-13:25	
水深(m)	11.6		25.8		13.3		7.6	
天候	快晴		快晴		快晴		快晴	
気温(°C)	9.0		11.2		11.2		11.8	
風向/ 風速(m/sec)	NNE/3.7		NNE/4.0		静穏(-/0)		SW/3.1	
波浪(m)	0.5		0.4		0.4		0.2	
透明度(m)	2.0		3.8		2.2		2.7	
観測層	表層	底層	表層	底層	表層	底層	表層	底層
水温(°C)	9.8	10.1	9.7	11.3	10.3	10.7	10.4	10.6
塩分(-)	31.4	32.3	32.4	33.1	32.1	32.7	32.3	32.7
DO(mg/L)	10.8	9.6	10.3	8.1	10.2	7.9	9.9	9.2
DO飽和度(%)	115.8	104.2	110.8	91.0	111.3	87.9	108.4	101.4
pH(-)	8.3	8.2	8.3	8.2	8.3	8.2	8.3	8.2
水の臭気	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし
備考								

観測層：表層(0m)・底層(海底面上 1m)

●主な出現種等 (速報なので、種名等は未確定です。)

主な出現種等	St.25	St.35	St.22	St.10
魚類	ハタタテヌメリ(+) テンジクダイ(+) マゴチ(r)	ハタタテヌメリ(+) テンジクダイ(r) コモチジャコ(r)	ハタタテヌメリ(r)	アカエイ(r)
魚類以外 (目立った種)	スナヒトデ(+) エビジャコ属(+) サルボウガイ(r)	タイラギ(c) スナヒトデ(+) シャコ(+)	オウギゴカイ(+) スナヒトデ(+) エビジャコ属(+)	スナヒトデ(c) ムラサキイガイ(c) エビジャコ属(r)
備考	上記の他、マトウダイ、オキヒイラギ、イッカクモガニ等が採取された。	上記の他、アカハゼ、ケブカエンコウガニ、フタホシイシガニ等が採取された。	上記の他、サルエビ、ケブカエンコウガニ、フタホシイシガニ等が採取された。トリガイの死殻が多く入網した。	上記の他、イッカクモガニ、アカガイ、サルボウガイ等が採取された。ホンビノスガイの死殻が多く入網した。

注)表中の()内の記号は大まかな個体数を表す。

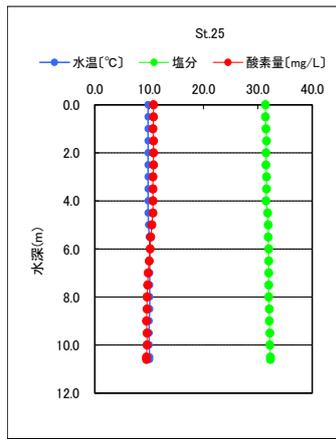
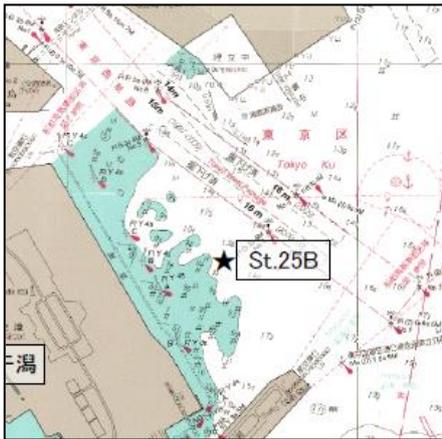
G:1000 個体以上、m:100~1000 個体未満、c:20~100 個体未満、+ :5~20 個体未満、r:5 個体未満

調査地点：St.25

調査地点位置

水質状況

地点状況



西側には東京国際空港と富士山が見える。

採取試料



主な出現種



内湾や河口域の水深30m以浅の砂泥底に生息する。稚魚は干潟域等の浅所で生活し、成長とともに深い場所へと移動する。砂泥底にひそみ、底生物や小型の魚類を餌としている。

東京湾全域から出現記録があり、特に湾中央に多い。砂泥底に生息し、甲殻類等を食べる。繁殖期は7~10月である。底曳網で大量に漁獲され、練り製品の材料等に利用されている。

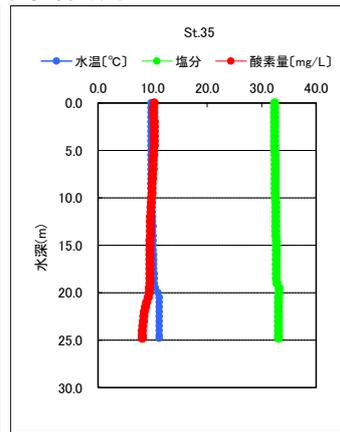
東京湾では、湾中央から外湾にかけての底曳網で、体長6~8cmの個体が採取されている。体長は30cm程に成長し、食用になる。名前の通り、平たい銀色の体の真ん中に、白く縁どられた黒い斑紋の「的」がある。

調査地点：St.35

調査地点位置



水質状況



地点状況



南側には風の塔が見える。

採取試料



主な出現種



ハゼの仲間の中では、比較的深所に生息する。東京湾全域から出現記録があるが、現在はおもに湾中央に分布する。湾奥では、1970年代までに減少したとされ、減少には、貧酸素水塊が影響していると考えられている。泥底から砂泥底に生息する。産卵期は春である。

成長すると、殻長 25cm を超える大型の二枚貝。尖ったほうを下にして海底に突き刺さったようにして生息している。内湾域の環境悪化や漁獲圧により、各地で資源量が減少している。東京湾湾奥部では、夏期を中心に発生する貧酸素水塊でほとんどの個体が死滅してしまう。

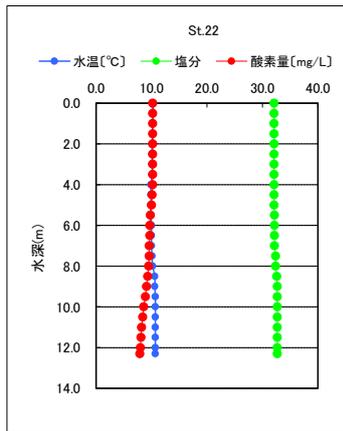
内湾奥から外洋に面した内湾の干潟から水深20mの砂泥底に生息する。底質に深く潜っているためか、生きた個体が採取されることは非常に少ない。各地で減少傾向にあり、環境省では絶滅危惧 I 類、千葉県では最重要保護生物(環境省の絶滅危惧 I A 類に相当)に選定されている。

調査地点：St.22

調査地点位置



水質状況



地点状況



北西側には東京ゲートブリッジが見える。

採取試料



主な出現種



全長 14cm 程になる。春や秋には、湾奥部に分布するが、夏には、湾中央のやや深い場所に分布する。本調査の主要種の1つである。東京湾ではメゴチと呼ばれ、てんぷら等で賞味される。



内湾の砂泥底に生息する大型のヒトデの仲間である。移動速度は速く、砂中の貝類等を捕食する。St.22 では、大きさの異なる個体が採取された。



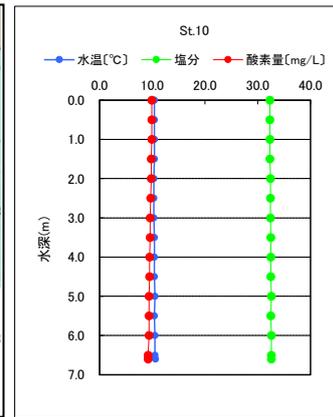
甲幅 3cm 程になる。水深 10~100m の砂泥底に生息する。東京湾では 2003 年頃から増加している。イッカクモガニとならんで、マアナゴなどの胃内容物として見つかっており、これら魚類の重要な餌となっている。

調査地点：St.10

調査地点位置

水質状況

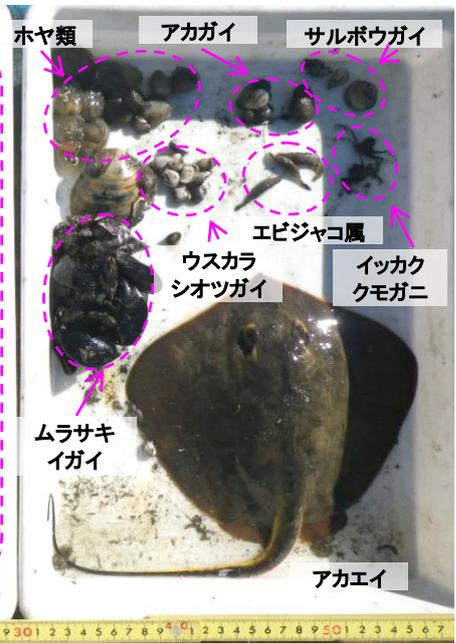
地点状況



北側には東京スカイツリーと東京ディズニーリゾートが見える。

採取試料

ホンビノスガイ(死殻)とスナヒトデ



主な出現種



東京湾で最も普通にみられるエイの仲間である。胸鰭(えいひれ)で海底をあおいで掘り起こして、隠れている甲殻類などを食べる。尾部の毒棘は大変危険。



外来種であり、有機汚染の進んだ都市圏の港湾や内湾の砂泥底に多い。周年にわたる幼生の放出と着底後の素早い成長が、貧酸素水塊の発生する東京湾奥で生存できる理由のひとつと考えられている。



貧酸素状態などの環境悪化に耐性がある。外来種であるが、東京湾ではおなじみの貝となっている。殻の色は本来白っぽい、底泥中の硫化物の影響で黒っぽくなっている。